



将軍職を秀忠に譲り、駿府へ

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



渡辺重明氏「在りし日の駿府城 慶長13年(1608)頃(部分)」。家康公は天正期に築いた二ノ丸までの城を三ノ丸まで拡張し、全面的に改築して、大御所時代の駿府城を築いた。富士山を借景に天下人のシンボルとしての美を追求し、本丸には五層七重の天守閣と御殿、紅葉山庭園を築いた。(画像提供:駿府城を愛する会)

天正十八年(一五九〇)八月一日(八朔)、家康公は小村であった江戸に入ります。これを「江戸御打入り」と呼び、八朔の日は幕府と江戸市民の重要な祝日となりました。この日、幕府の吉例にならつて吉原の遊女たちが揃つて純白の衣装を着たことも有名です。

その前年に家康公は駿府で天台宗の僧・天海と会い、帰依するとともに、それ以降徳川家のアドバイザーに起用しています。

江戸御打入りの二年後、文禄・慶長の役(一五九二―一五九八)と呼ばれる朝鮮出兵が始まりました。この戦争は十六世紀世界最大の戦争で、派遣された日本軍にも、救援に駆けつけた明国軍にも、そして何よりも突然戦場となった朝鮮国の人々にとつても、本当に悲惨なものでした。

秀吉から辺境の地であった関東に追いやられた家康公の朝鮮出兵は見送られました。秀吉の命を受け渡朝して厳しく督戦に努める石田三成ら朝鮮奉行と、苦しい戦いを続ける加藤、黒田らの諸将とのあいだに確執が生まれます。

後の関ヶ原の合戦で、これら第一線で戦った諸将の多くが、家康公率いる東軍に参加することになったのはこのためです。

秀吉は三十万の新たな軍勢を率いて渡朝することを計画しますが、家康公と前田利家の反対にあい、失意の内に慶長三年(一五九八)、六十二歳で亡くなります。利家と家康公はその喪を秘したまま、全軍の引き上げを命じます。

慶長五年(一六〇〇)、五十九歳の家康公は天下分け目の関ヶ原の合戦で勝利し、事実上の日本

の支配者になりました。

この年に、難破したオランダ船の水先案内人であった英国人ウィリアム・アダムス(三浦按針)とオランダ人ヤン・ヨーステンを召し出して側近に加えています。

二年半後の慶長八年に征夷大将軍となつて江戸に幕府を開きました。その二年後の慶長十年には将軍職を秀忠に譲り、天下普請として駿府城を大改築し、慶長十二年、十七年ぶりに三度目の駿府へ大御所として移りました。

臨済宗の禅僧・金地院崇伝と、若き俊英の儒者・林羅山を召し出したのもこの頃です。

家康公最後の戦いは、関ヶ原の合戦から十四年後の慶長十七年(一六二四)に起こった大坂冬の陣と翌年の夏の陣で、家康公は七十歳でした。